

旅の文化・旅の文学

旅の造型と享受

今関 敏子

一、はじめに

人はどうして出発することの悦びばかりを、説いてきたのだろう。旅の魅力語る者たちは、つねに帰ることについて、できることならば触れないでいたいような、不幸なできごとであるかのように見なしてきた^①。

と、四方田犬彦氏は述べておられます。現代の旅はまさにこの通りでしょう。共感する一方、日本の古典文学に親しんでいる立場で、こういう文章に出会うと、多少の違和感も覚えます。なぜなら、平安鎌倉期の旅の表現は全く逆だからです。出発することを手離して悦ぶ表現には、まず出会ったことがありません。都を捨て果てたつもりであってもやはり離れがたく、しばし躊躇します。旅立ちの辛さと悲しみばかりが和歌にも紀行にも表現されています。旅の途中、常に都に対する望郷の念を旅人は持ち続けます。帰ることについては、「触れないでいたい」どころではなく、帰ることは悦びです。往路は、都から離れ行く時間と距離を惜しみ、帰路は都に近づくのを喜ぶという類型表現がみられます。

また、旅する女性に注目しますと、たとえば古代中国では、女性は家の中にいるのが美德という徹底した男社会であり、さらに治安の悪さが加わって、女性の旅は不可能に近かったということです。アメリカでもつい数十年前までは、一人旅の女性を泊めないことがホテルの格式を示すものでありました。古今東西、女性の旅、とりわけ一人旅が歓迎されることは無いようですが、日本の女性たちは、実に澆刺と旅をしていたと言えます。近年は、旅をする女性について、歴史学方面からのアプローチも盛んです^②が、とりわけ、鎌倉期以降、京

と東国の交通、交易が盛んになるにつれ、女の旅も活気を帯びるようになります。江戸期には入り鉄砲・出女、関所の女攻めといった制度的規制、又、女人禁制の地の多い不便さにも関わらず、たくさんの女たちが多様で個性溢れる旅をしているのに驚かされます^③。

本日は、平安鎌倉期に焦点を絞って、旅とその表現についてお話させていただきます。

二、紀行と表現類型

《紀行という表現》

現代では最も多く一般的な旅行は観光旅行でしょう。しかし、観光旅行に相当する旅は平安鎌倉期にはほとんどありません。いわゆる物見遊山は、江戸期に至って現れる現象です。平安鎌倉期の貴族階級の旅には明確な目的とコースがありました。男性の場合は、公務、転任、修行行脚等が主たる目的であり、女性は父や夫の転任、物詣といったところでした。

鎌倉期以降にはかなりの数の紀行文が書かれました^④が、いずれも日次を追い、和歌が詠みこまれます。そもそも、歌を必ず織り込む日記形式の旅行記を残すこと自体、日本文化のひとつの特徴ではないかと思われます。たとえば、古代中国では、歴史家の司馬遷が中国最初の大旅行家といわれますが、彼は旅行記そのものを残してはいません。むしろ、古代中国では、旅をした詩人たちが詩を書き残すことは盛んで、そのような作品も多く現存しますが、日記形式の旅行記となると、きわめて数が少ないのです^⑤。数少ない中国の旅行記は、案内記たり得るほど、旅の情報が正確であることが特徴で、平安鎌倉期の紀行のように必ず歌を詠みこむような表現類型はありません。

旅をテーマにした文学形態として冒険物語、探検記、発見記は何故書かれなかったのでしょうか。紀行が多く書かれたのは特徴的ではないのでしょうか。その作者のほとんどは、男性です。旅をした女性たちも、旅の記を書きましたが、女性の場合、旅の記は紀行として常に独立しているわけではありません^⑥。平安

鎌倉期には、作者の人生の一側面、又はある時期を選択して回想のうちに綴る、いわゆる日記文学と呼ばれるジャンルがあります。旅の経験は書くべき素材として選択され、日記作品の一部を成しています。平安期の『更級日記』は、恰好な例でしょう。作者にとって意味ある人生の時間として旅があると申せましょう。鎌倉期以降の日記文学は紀行部分を含む作品がほとんどですが、これは女性たちの行動半径の拡がりを示しています。

《歌枕》

紀行には表現類型がありました。その一つは歌枕探訪です。「宇津山」を例にみておきたいと思います。

・岳部ノ里吧ヲ過テ遥ニ行バ、宇津山ニカ、ル。(中略)足ニ任スル者ハ
苔ノ岩根薦ノ下路、嶮難ニタヘズ。暫クウチ休メバ、修行者一両客、繩床
ソバナタテ、又休ス。

立帰ル宇津ノ山臥コトツテン都恋ツ、独越キト

(『海道記』新日本古典文学大系『中世日記紀行集』93～94頁)

・宇津の山を越ゆれば、薦かづらはしげりて、昔の跡たえず。業平が修行者
者にことづけしてん程、いづくなるらむと見行く程に、

(『東関紀行』新日本古典文学大系『中世日記紀行集』143頁)

・宇津の山越ゆる程にしも、阿闍梨の見知りたる山伏行きあひたり。「夢
にも人を」など、昔をわざとまねびたらん心地して、いと珍かに、をかし
くも哀にもやさしくも覚ゆ。急ぐ道なりと言へば、文もあまはえ書かず。
たゞやむごとなき所一つにぞ、音信れ聞こゆる。

我心うつ、共なし宇津の山夢にも遠き都恋ふとて

薦楓時雨れぬ隙も宇津の山涙に袖の色ぞ焦がる、

(『十六夜日記』新日本古典文学大系『中世日記紀行集』192頁)

『海道記』『十六夜日記』では、薦楓が茂ってまことに都合よく山伏が登場していますが、いつもこうはいきません。『とはずがたり』では宇津山とは知らずに、通り過ぎてしまいます。

さても宇津の山を越えしにも、蔦・楓も見えざりしほどに、それとだに
知らず、思ひ分かざりしを、ここにて聞けば、はや過ぎにけり。

言の葉もしげしと聞きし蔦はいづら夢にだに見ず宇津の山越え

(新潮日本古典文学集成231～232頁)

つまり、紀行文には歌枕を踏まえるという類型表現があつて、歌枕ではともかく歌を詠みますが、必ずしも、その風景がすばらしかったりするわけではない、それでもそれに触れるということです。この類型は、踏襲されていきます。かなり時代の下る近世の女たちも、前時代と同じように、旅先で歌を詠み、それを書きとめています。旅人は、初めての風景に接しても、まず伝統に自分を合わせます。虚心坦懐に眼前の風景を味わうのではなく、歌枕という先入観を持って接するということになります。人々は伝統に自己を一体化させ、言葉で構築した旅作りをしてきたと言っても過言ではないと思います。

《都回帰》

歌枕に並ぶ紀行の類型表現に、都回帰があります。はじめに申しました、都を離れるのは悲しい、近づくとうれしいという姿勢です。平安鎌倉期の文学の担い手は貴族階級でした。都は宮廷のある場所であり、貴族社会の制度を象徴する場であり、政治経済文化すべての中心であり、規範であり、絶対空間とも言える場でした。

旅には危険が伴いますが、旅の危機には二種類、考えられます。まずは、外的危機です。これは旅先で出会う地震、台風といった自然災害、事故、山賊や海賊に会う災難といった予期せぬ出来事です。一方、内的危機とは、いわゆる異文化ショックというものです。それまで安住して疑わなかった枠組み、制度、価値観が絶対ではないという揺さぶりをかけられ、混乱をきたし、自分を失ってしまうくらいの精神の危機をさします。これは、大変苦しいものですが、乗り越えれば新しい世界が開け、大きく成長する機縁になり得ます。

都を絶対とする姿勢は、内的危機から旅人を守ります。地方に行つて、都とは違う習慣、文化に出会つても、都に比べて劣る、と受けとめる、つまり、異

文化に接触しても、都の優越、優位を確認するだけなので、自己の中心が揺らぐことはありません。たとえば、鎌倉期の後深草院二条は、当時としてはかなり冒険的な旅人ですが、それでも、都から来た雅な尼である姿勢を崩しません。この人は危うく人買いの手に落ちそうになっていますし、外的な危機には会っているのですが、内的危機には無縁だったと言えます。

《制度と旅》

歌枕も都回帰もひとつの枠組みです。枠組みを壊さない限り、内的危機からは安全でいられます。平安鎌倉期の紀行文は必然的に、冒険記、探険記にはなり得ず、また、正確なガイドブックにもなり得なかったのです。平安鎌倉期の紀行に書かれるのは、枠組みのある制度的な旅でした。

制度は人を守りますが、一方では人を縛り、異質のものを排除するという面を持ち合わせています。制度に安住している人間にはかえって制度の構造、矛盾は見えにくくなります。文学に表現される旅の在り方には、制度をめぐる分類が可能ではないかと思われます。ひとつは、安住（帰属）を前提とした旅、紀行に書かれる目的とコースの定まった旅は制度的な旅です。もうひとつは制度からの逸脱、または排除の旅、つまり都へ帰るあてもない、目的もない流浪の旅です。

三、流浪—小町と業平

流浪する主体は、みずから旅の記を書きません。紀行は定住の場のある制度的な旅人によって書かれます。一方帰属する場のない流離、場を失った流浪の悲劇は、物語や伝承の中で第三者の手によって造型されます。

流浪した代表的な女性といえば小野小町でしたが、小町が紀行を書いたわけではありません。流浪する小町像は、平安期から室町時代にかけて、伝承の過程で造型されていきました^⑦。百夜通い説話、髑髏説話などが代表的な説話というところでしょうが、伝承を繋ぎ合わせますと、まことに辻褄の合ったひとりの女の生涯が浮かび上がってきます。——美しい小町は彼女に言い寄る数多の

男たちを翻弄し、苦しめた。若い頃こそ美貌と才知で人を魅了したが、その驕慢の報いで零落し、遊女となった。老醜を晒して流浪し、行き倒れ、遺体は葬られず放置された。鬮腰の眼からは薄が風に靡き「あなめ、あなめ」と苦しみ続ける。——長い時間をかけて、たくさんの人の手によって、裸形に近い穢れた非人身分の流浪者、往生かなわぬ穢れた横死に象徴される小町像は形成されました。制度から逸脱した女性のなれの果てです。ここには、伝承する側の価値観、女性観、社会背景、制度というものが投影されているわけですが、特に顕著なのは制度からの排除という側面です。

流浪する代表的な男性は業平でしょう。業平は、伝承の過程で、小町の鬮腰を発見した人になっています^⑧。業平は『伊勢物語』の昔男のモデルであり、東下りと言われる流浪の旅に出ています。

いかにもありそうなことを書くのも、あり得ないことを書くのも、どちらも物語の醍醐味だと思いますが、東下りは、現実にはあり得ない筋立てではなかったかと思われます。いくら京にありわびたからといって、平安期の貴族階級の男性が、二人くらいの人と連れ立って、道もわからないのに住む場所を東国に捜してやみくもに出かける、すなわち、目的もコースも定まらない旅をすることは、この上なく非現実的、第一危険です。が、ともかく『伊勢物語』の昔男は、都という定住の地を喪失した流離の旅に出ることになります。そこには、悲劇的要素が濃厚です。ただし、小町伝承ほど残酷で悲惨ではありません。昔男の場合、自らが、「身を要なき者」に「思ひなした」のであって、社会的制裁を受けて追放されたわけではありません。『伊勢物語』には説明はないのですが、東下りの段の直ぐ前に、高子との道ならぬ恋が書かれていますから、失恋が原因という受けとめ方が定着していくようで、髻を切られたので歌枕を訪ねたという後代の説話（『無名抄』）には、ゆとりのある享受が窺えます。昔男の反制度的生き方が糾弾されたりはしません。彼は、後代に愛されてきたと言えるかと思います。同じ流浪の伝承でありながら、女性と男性ではこのような相違があります^⑨。

四、『伊勢物語』と勅撰集—流浪の要素と旅の歌

さて、反制度的な流浪である『伊勢物語』の東下りが、勅撰集にどのように摂取されていくのか^⑩を見ながら、旅の歌の表現の特質を考えてみたいと思います。

周知のように、『伊勢物語』は、勅撰集、とりわけ『古今集』に重なる箇所が多い作品です。二十一代集中、『伊勢物語』に重なる旅歌が見出せるのは、『古今集』『後撰集』『新古今集』『新勅撰集』の羈旅歌です。

	羈旅歌の歌数	重なる歌数と『伊勢物語』の段	計
古今集	16首	2首（9段）2首（82段）	4首
後撰集	18首	1首（7段）	1首
新古今集	94首	1首（8段）1首（9段）	2首
新勅撰集	46首	1首（83段）	1首

『伊勢物語』にぴったり重なる旅の歌はそう多くはありません。勅撰集全体で8首。そのうち、4首を『古今集』が占めています。わずか4首でも『古今集』の場合、羈旅歌全体数の割合をみれば、群を抜いて多いことになりまして、羈旅歌の25%を占めることとなります。続いて『後撰集』1首。5集隔たって、『新古今集』2首、『新勅撰集』1首と続き、直接的な『伊勢物語』摂取は姿を消してしまいます。

全体の特徴として、『古今集』の詞書は長く、内容も『伊勢物語』本文にほぼ忠実に重なるのですが、時代が下るにつれ詞書は簡略化されていきます。

『古今集』と『伊勢物語』の関連について片桐洋一先生^⑪は、「たとえば『古今集』恋三・六二二と『伊勢物語』第二五段の場合や、『古今集』雑上・八七一と『伊勢物語』第七六段の場合のように、『伊勢物語』がその増益の過程において『古今集』の歌を材料として採り込んだという場合もあるが、その逆に『古今集』恋五・七四七と『伊勢物語』第四段、あるいは『古今集』恋三・六三二と『伊勢物語』第五段の場合のように、『古今集』が既に形をなしてい

た原初形態の『伊勢物語』を素材に用いたとしか考えられない場合」があることを踏まえ、羈旅歌については、『古今集』が『伊勢物語』から収録したという見解を明らかになさっています。

勅撰集における旅の歌は『伊勢物語』から、何を採り、何を採らなかったのか、時代が変遷すると、どのように変わっていくのか、『伊勢物語』の旅の叙述を勅撰集の羈旅歌と比べながらみてまいります。(以下、『伊勢物語』引用部の傍線部分は、勅撰集の詞書にない箇所です。また、勅撰集引用部の 部分は『伊勢物語』と異なる箇所です。)

逸脱した皇統

『伊勢物語』の旅といえば東下りですが、『伊勢物語』には、惟喬親王と馬頭(業平)が狩にでかけて旅寝をする場面があります。京都近郊の逍遙も旅なのです。当時は、定住している場所を離れることは距離に関わらず旅でした。これをみておきたいと思います。

《伊勢物語八十二段》

(上略) この酒を飲んでむとて、よき所をもとめゆくに、天の河といふところに至りぬ。親王に馬頭大御酒まるる。親王ののたまひける、「交野を狩りて、天の河のほりにいたるを題にて、歌よみて杯はさせ」とのたもうければ、かの馬頭よみて奉りける。

狩り暮らし棚機津女に宿からむ天の河原に我は来にけり
親王、歌をかへすがへす誦じ給うて、返しえし給はず。紀の有常御供に仕
うまつれり。それが返し、

一とせにひとたびきます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ

《古今集羈旅》

惟喬親王の供に狩りにまかりける時に、天の河といふ所の 河のほと
りにおりて酒などのみけるついでに、親王のいひけらく、狩りして天の河原にいたるといふ心をよみて杯はさせといひければよめる

在原業平朝臣

418狩り暮らし棚機津女に宿からむ天の河原に我は来にけり

親王この歌を返す返す読みつつ返しえせずなりにければ、ともに待
りてよめる 紀有常

419一とせにひとたびきます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ

『古今集』の詞書に地名が記されていない他は、ほとんど内容的に一致しま
す。

《伊勢物語八十三段》

むかし、水無瀬にかよひ給ひし惟喬の親王、例の狩しにおはします供に、
馬頭なる翁つかうまつれり。日ごろへて宮にかへり給うけり。御送りして
とく去なむと思ふに、大御酒たまひ禄たまはむとて、つかはさざりけり。
この馬頭、心もとながりて、

枕とて草ひき結ぶこともせじ秋の夜とだに頼まれなくに
とよみける。時は三月のつごもりなりけり。親王大殿籠らであかし給うて
けり。

《新勅撰集 羈旅歌》

惟喬親王の狩りしける供に日ごろ侍りて、かへりて侍りけるを、猶
とどめ侍りければよみ侍りける 業平朝臣

538枕とて草ひき結ぶこともせじ秋の夜とだに頼まれなくに

『新勅撰集』は『伊勢物語』に比べても『古今集』に比べても、詞書が簡略
だと申せましょう。ただし、表現は異なっても『伊勢物語』の内容が『新勅撰
集』で変わってしまうことはありません。

何と言っても、『伊勢物語』八十二、八十三段で中心になっているのは、逸
脱した皇統・惟喬親王と臣下の交流です。物語の主人公（業平＝馬頭）も皇統
の血をひいていて、主流から外れた現実を共有するがゆえになおの事、付き随
っている紀有常も業平も親王に寄せる敬慕の念は深く、狩の思い出は忘れがた
い。八十二、八十三段は、逸脱の皇統の物語、中心から排除された人間の物語
と言い得ると思います。このテーマはほとんど勅撰集の羈旅歌には反映されて

いません。『古今集』では、その長い詞書と物語が相俟って、直接表出されていないものも多少は享受者に伝わったかも知れませんが、時代が下るとさらに『伊勢物語』に顕著な、中心からの逸脱という悲劇性は、捨象されていきます。勅撰集の旅の歌に関しては、逸脱の悲劇性を匂わせるものが『伊勢物語』から踏襲される事はなかったのです。

東下り―七段・八段と勅撰集

『伊勢物語』と重なる勅撰集羈旅歌で注目すべきは、何と言っても東下りでしょう。

《伊勢物語七段》

むかし、男ありけり。京にありわびて東にいきけるに、伊勢、尾張のあはひの海づらを行くに、浪のいとしろくたつを見て、

いとどしく過ぎゆくかたの恋ひしきにうらやましくもかへる浪かな
となむよめりける。

《後撰集 離別 羈旅》

東へまかりけるに、過ぎぬる方恋ひしくおほえけるほどに、河を渡りけるに浪のたちけるを

業平朝臣

1352いとどしく過ぎゆくかたの恋しきにうらやましくもかへる浪かな

『後撰集』詞書に、「京にありわびて」という“旅人の事情”はありません。さらに、大きく変更されているのは、「伊勢、尾張のあはひの海づら」が「河」となっていることです。また、『後撰集』では、『伊勢物語』の浪が「白く」立っていた描写はなく、『伊勢物語』にはない表現「過ぎぬるかた恋しくおほえけるほどに」がみえ、過去への懐旧の念を強調しています。

この「いとどしく…」歌は、都からの空間の隔たりと、過ぎ行く時間の隔たりを詠んでいます。喪われた時空は取り戻せないのに、往復運動を繰り返す波の羨ましいことよという趣です。この趣向が盛んに踏襲された形跡はありませんが、『新拾遺集』の羈旅歌に「835うき枕結びもはてぬ夢路よりやがてうつつにかへる波かな」があります。

《伊勢物語八段》

むかし、男ありけり。京や住み憂かりけむ、東のかたにゆきて住みどころ求むとて、友とする人ひとりふたりしてゆきけり。信濃の国、浅間の嶽に、けぶりの立つを見て、

信濃なる浅間の嶽に立つけぶりをちこち人の見やはとがめぬ

《新古今集 羈旅歌》

東のかたにまかりけるに、浅間の嶽にけぶりの立つを見てよめる

業平朝臣

903信濃なる浅間の嶽に立つけぶりをちこち人の見やはとがめぬ

『新古今集』の詞書は、実に簡略ですね。既に掲げました『後撰集』の七段撰取に共通して、京に住みにくくなった“旅人の事情”と、東国に居場所を捜して一人二人の友と行ったという“流浪性”が捨象されています。

東下り—『伊勢物語』九段と勅撰集

東下りの山場ともいえる九段を行程に従って、八橋、宇津山、富士山、角田河の順に検討してみます。

(1) 八橋

《伊勢物語》

むかし、男ありけり。その男、身を要なきものに思ひなして、京にはあらじ、東のかたに住むべき国求めに、とてゆきけり。もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり。道知れる人もなくてまどひいきけり。三河の国、八橋といふところにいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つわたせるによりてなむ、八橋といひける。その沢のほとりの木のかげに下り居て、かれいひ食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたいふ五文字を句のかみにすゑて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ
とよめりければ、みな人かれいひの上に涙落してほとびにけり。

《古今集 羈旅》

東のかたへ友とする人ひとりふたりいざなひていきけり、三河の国
八橋といふところにいたれりけるに、その河のほとりにかきつば
いとおもしろく咲けりけるを見て、木のかげにおりゐて、かきつば
たといふ五文字を句のかしらにすゑて旅の心をよまむとてよめる

在原業平朝臣

410唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

『古今集』詞書で省略されている『伊勢物語』の内容は次のようになります。

- i 京には己の価値を見出せず、居場所を東国に求めた、という“旅人の事情”
- ii 道を知る人もなく、迷いつつ行った、という“旅のあり方”
- iii 蜘蛛手に流れる川に八つ橋を渡した、という八橋の“地名の由来”
- iv 川辺の木陰で乾飯を食べた、という“ものを食べる行為”
- v 歌に感動して人々が泣いたこと。乾飯がふやけたこと。すなわち“歌の影響・効果”

一首の歌に対する人々の反応（v）は、歌物語では重要な歌の力、歌の効果をあらわすと考えられますが、この点については、角田河を検討する際に再び触れることに致します。

『古今集』で何よりも注目すべきは、旅する主体の動機（i）と旅のあり方（ii）の省略です。『伊勢物語』の主人公である男は悲劇的狀況で旅をしているのです。この世に自身が身を置くべき場所がないと思い、都を後にする。「もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり」（伊勢物語）は、心細さの表明ですが、『古今集』の「友とする人ひとりふたりいざなひていきけり」という表現には、旅の道連れという以上の悲劇的狀況は読み取りにくいでしょう。ここには、愁いや悲しみという旅人の心情は投影されていません。『伊勢物語』に表出されている昔男の旅は、帰る場所のない、居場所捜しの旅です。しかもコースが定まっているわけではなく、迷いつつ、心細い旅を続け、東に下っていくのです。

言うまでもなく、そこには、これらの状況が、勅撰集の和歌の詞書としてふさわしくない、という判断が働いていると思われませんが、『古今集』が取り入れなかった『伊勢物語』の重要な要素は、旅の“流浪性”です。

勅撰集が「八橋」から摂取したのは、都より遙か遠くまで来たという思いと、恋しい人の残る都を思う望郷、郷愁の念でした。

(2) 宇津山

《伊勢物語》

ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、つたかへでは茂り、もの心ほそく、すずろなるめ
を見ることと思ふに、修行者あひたり。「かかる道はいかにかいまする」
といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、ふみ書きてつく。

駿河なる宇津の山辺のうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり

《新古今集 羈旅歌》

駿河の国宇津の山にあへる人につけて、京につかはしける

業平朝臣

904駿河なる宇津の山辺のうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり

『新古今集』では、『伊勢物語』に述べられる詠歌状況は見事に捨象されてしまいます。「ゆきゆきて」という、遠い距離を歩き続けるという表現、宇津の山の状況の記述はありません。旅の困難さ、心細さの表出が、『新古今集』にはないのです。

ちなみに、「宇津山」が、二十一代集の羈旅歌に詠まれるのは、まさしく、『新古今集』以降（16例）でした。それ以前には、旅の歌として「宇津山」を詠み込んだ歌が載ることはありませんでした。『新古今集』が『伊勢物語』九段を採りこんで後、定着したと思われまふ。しかもほとんどは題詠です。興味深いことには、『続古今集』以降、『新古今集』の詞書では省略された「蔦」「楓」、小暗い山道が詠まれるようになり、『伊勢物語』享受が定着していく過

程がわかります。

(3) 富士山

《伊勢物語》

富士の山をみれば、五月のつごもりに、雪いとしろう降れり。

時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ
その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどし
て、なりはしほじりのやうになむありける。

ここは、地の文も和歌も、都人にとっては珍しい富士山の形、地形が記述されています。勅撰集の旅歌に、『伊勢物語』に重なる富士山は見当たりません。この箇所が勅撰集に採られなかったのは、地の文も歌も地形の説明に終り、望郷の思い、旅の心情が述べられてはいないからでしょう。この点は八橋の地名の説明が『古今集』にはないことと関連していようかと思われます。

(4) 角田河

《伊勢物語》

なほゆきゆきて、武蔵の国と下総の国との中に、いとおほきなる河あり。
それを角田河といふ。その河のほとりにむれゐて、「思ひやれば、かぎり
なく、遠くもきにけるかな」と、わびあへるに、渡守、「はや舟に乗れ。
日も暮れぬ」といふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、
京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、しろき鳥の嘴と脚とあかき、
鳴のおほきさなる、水のうへに遊びつつ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、
みな人見知らず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、
名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人は在りやなしやと
とよめりければ、舟こぞりて泣きにけり。

《古今集 羈旅》

武蔵の国と下総の国との中にある角田河のほとりにいたりて都のい
と恋ひしうおほえければ、しばし河のほとりにおりゐて、思ひやれ
ばかぎりなく遠くも来にけるかなと思ひわびてながめをるに、渡守、

はや舟にのれ、日暮れぬといひければ舟に乗りて渡らむとするに、
みな人ものわびしくて、京に思ふ人なくしもあらず、さるをりにし
ろき鳥の嘴と足とあかき河のほとりに遊びけり、京には見えぬ鳥な
りければみな人見知らず、渡守にこれは何鳥ぞと問ひければ、これ
なむ都鳥といひけるをききてよめる

411名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人は在りやなしやと

内容的には、ほとんど一致する撰取ですが、「なほゆきゆきて」という長い
行程を経た事情が『古今集』詞書にはありません。『伊勢物語』の「わびあへ
る」は、旅の道連れと共感する表現としては『古今集』詞書「思ひわびてなが
めをる」より強いように思われます。『古今集』では角田河の地形的説明「い
とおほきなる河なり」が省略され、『伊勢物語』にはなかった「都のいと恋ひ
しうおぼえければ」が付加され、望郷という旅人の心情を強調しています。

さらに、既に触れた「八橋」同様、『古今集』詞書には、『伊勢物語』に顕著
な“歌の影響・効果”で、人々が泣いたという記述がありません。八橋では、
「唐衣…」歌に感動し、旅人たち涙を落として、乾飯がふやけてしまう。角田
川では、「名にしおはば…」歌に舟中の人泣いてしまう。現代から見れば、
いささか滑稽に映るでしょうが、歌にはそれほどの力があったということなの
です。まさしく歌物語『伊勢物語』は、歌の効果で物語が展開していきます。
恋の歌ももちろんそうです。

旅を詠んだ歌に感動して泣くのは、人々が同じ思いを共有しているからで、
人々の心の奥にあるものを、歌が呼び覚ましたということになります。それは
望郷の念であり、都に向ける眼差し、都を遠く離れていることの孤独と悲哀で
す。人々が共感するのは、このような旅人の心情です。

そもそも、『伊勢物語』に表出されるのは、一般的な当時の旅ではありません
でした。京にいつらくなって、目的も定めず、二、三人で連れ立って、道も
わからぬ未知の土地に居場所を求めて出かけた昔男の旅はまさしく流浪でした。
ですから、物語の歌に詠みこまれているのは、定住の場である都へ帰ることが

前提の、定まったコースを辿る旅人の心情ではないのです。都を喪失した男の歌だからこそ効果がありました。人々を衝き動かす歌は、特殊な事情の旅人、昔男の詠歌でなければなりません。二度と帰る当てのない都への望郷の念であればこそ、その悲哀は深いわけですが、『古今集』ではこのような逸脱の面は捨象されてしまうのです。

旅人が現実に関東まで行き、都鳥に会うということは稀だったでしょうから、後代、「角田河」「都鳥」は盛んに題詠で詠まれました。そこで中心になるのは、都を恋うる望郷の思いでした。さらには、角田河とは無縁に、「都鳥」、「こと問ふ」のみが採られるようにもなりました。

四、旅の造型と享受

東下りは、地名とそれに付随する「かへる浪」「唐衣」「かきつばた」「蜘蛛手」「都鳥」といった旅の風物をも取り込んで歌枕として定着していきました。言うまでもなく、言葉の摂取にとどまらずに、『伊勢物語』に読みとれるある種の情趣を包み込んでいます。それは主として、旅人が、思う人のいる都へ向ける望郷の念であり、過ぎ去った時間と空間の距離でした。

一方、勅撰集には決して採られなかった東下りの一面があります。それは、『伊勢物語』に特徴的な“流浪”の要素であり、流浪に伴う疎外感、その疎外感が織りなす悲哀と孤独でした。^⑩『伊勢物語』に顕著な特徴である逸脱性、流浪の悲劇性がみごとに捨象されています。勅撰集に詠まれる旅の歌は、あくまでも都が出発点であり帰着点である事が前提の、旅の類型表現の枠に収まりません。

『伊勢物語』では当然、三人称で、主人公の流浪の旅は語られます。一方、勅撰集では、旅（たとえ想像上の旅であっても）する主体が旅を表現しています。従って、『伊勢物語』と同じ歌でも勅撰集に載った途端、歌と旅の質は変わってしまうのです。反制度的な“流浪”は、制度的な“旅”へと変容します。

『伊勢物語』の東下り摂取をみてきますと、旅の経験の有無に関わらず、旅

の歌は詠めるということがよくわかります。歌枕さえ押えていれば、旅の歌は詠めます。時代が下るほど、勅撰集の羈旅歌には、実景歌より題詠歌が増加する傾向を安田徳子氏が指摘なさっていますが^⑬、題詠が増えればなおいっそう、旅の表現は、一種の制度的枠組みの中の造型となっていきます。歌枕は都で醸成された地方の美的把握であり、都からみた地方の共通理解であり、多分に観念的な伝統であるわけです。

同様に、理論上、旅をしなくとも紀行を書くことは可能です。夙に、プルチヨウ氏が、次のようにおっしゃっています^⑭。

由緒ある歌のイメージや「歌枕」を重視する日本の紀行は、距離・費用・宿の質や食物、そして船の便に関する情報などを含むヨーロッパの参詣記とは大きく違っており、むしろフィクションの世界に属するものであった。それゆえに日本の紀行は形式と内容が伝統に忠実であれば、たとえ現実に旅にでかけなくても、家で想像上の旅行記を書くことは決して不可能なことではなかったのである。

歌枕は紀行が虚構となる大きな要素ですが、紀行は旅の同時報告ではないという点で虚構を生みやすいということが言えると思います。時間の進行とともに空間を移動していくのですから、時間と空間は正比例するはずですが—これが正確ならガイドブックにもなり得るのですが—、旅の過程を事実通りに逐一書くのが紀行ではありません。必要なもの、書きたいことは、強調されますが、そうでないものは省略されます。また、時間が前後することもあります。これは、後から回想することによっても起こりますし、意図的に創作されることもあります。ちょうど、絵巻の時間が右から左に進行し、強調したいものが場面を占めることや、異時同図（『信貴山縁起絵巻尼公の巻』）の手法がとられるのと、大変よく似ています。この意味でも、紀行は、旅行という体験を表現するにあたって捉えなおしたフィクションであると私は考えています。

ともあれ、“かくあるべき旅”の情趣を表現する恰好の手段として、歌枕のイメージは、伝統を踏まえつつ実景とは別に膨らんでいきます。こうして類型

表現が確立していきます。東下りはこのような旅の文化の醸成におおいに貢献した、ひとつの方向性を示した、と言い得ると思います。

旅の歌を詠むにしても、旅をする主体が自らの旅を書くにしても、旅が第三者によって創作され流浪の悲劇として伝承されるにしても、いずれにしても文学的次元の旅として「造型された旅」を人々は享受し、その情趣、伝統を味わい、独自の旅の文化を作り上げていったのでした。

【註】

- ①四方田犬彦「帰還の悦び」『旅の王様』マガジンハウス 1999
- ②a 網野善彦『中世の非人と遊女』明石書店 1994
b 細川涼一『逸脱の日本中世—狂気・倒錯・魔の世界』洋泉社 1996
c 細川涼一「中世の旅する女性」『女と男の時空』藤原書店 1996
d 柴桂子『近世おんな旅日記』吉川弘文館 1997
- ③②の d
- ④高倉院巖島御幸記、南都巡礼記、海道記、信生法師集、東関紀行、南海流浪記、関東往還記、太神宮参詣記、小島のくちずさみ、等。
- ⑤『入蜀記』（陆游）『字役誌』（欧陽修）『呉船録』（范成大）等。
- ⑥ただし『十六夜日記』は全体を紀行とみなし得る。
- ⑦今関敏子『〈色好み〉の系譜—女たちのゆくえ』世界思想社 1996
『〈色好み〉の流浪—小野小町の運命』文学 3-1 2002・1
- ⑧江家次第、古事談
- ⑨⑦に同じ。
- ⑩今関敏子「造型される“旅”—東下りと勅撰集」川村学園女子大学紀要13-2 2002・3
- ⑪『古今和歌集全評釈』（中）講談社（157頁）1998
- ⑫逸脱の悲劇性が勅撰集の羈旅歌に皆無という意味ではない。きわめて例外的であるが、『古今集』羈旅歌の第1首に安倍仲麻呂歌「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」（406）、続いて小野篁歌「わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海人の釣舟」（407）が掲載されている。『伊勢物語』撰取については、流浪の悲劇性は捨象されていると言える。
- ⑬安田徳子「旅歌の変遷」『中世和歌研究』第1章第1節 和泉書院 1998
- ⑭H・Eブルチョウ『旅する日本人 日本の中世紀行文学を探る』武蔵野書院 1983